

# 「さくら精機とはいったい何屋なのか？」 器用さと独創性で、お客様をあっと思わせる

## さくら精機 株式会社



創業以来、確かな技術力で3つの製品群をつくりあげたさくら精機株式会社。祖業である「教育関連機器」、現在の売上の柱である「オフィス関連機器」、世界一の技術を持つ「製本機器」という3本柱には、世界で同社のみ供給できる製品や、世界最高性能を誇る製品もあります。確かな技術力を持つ同社の製品開発へのこだわりや、主力商品の開発秘話、そして今後の展望について、代表取締役社長の村本一平氏にお伺いしました。

### 初期の製品は「虫取り用具」

1948年（昭和23年）、私の祖父が大阪市内で理科実験機器の製造をはじめたのが、さくら精機の創業です。

もともと、村本家は戦前に大阪で栗おこしの原料を製造していましたが、戦争で工場は全焼してしまいました。そこで旋盤工の知人と起業することとし、知人が製造、私の祖父が営業という形で、前川科学（現在は廃業）という会社向けに納入を開始しました。

1949年には、現在の主要取引先である内田洋行との取引を開始しました。伝え聞いている話ですが、昆虫標本用の毒ビンや捕虫器（今でいう虫捕り網）のパーツを製作したのが最初のことです。

### 教育・オフィス関連機器の発展

当時は実験道具などの教育関連機器が中心でしたが、同社との取引も増えていく中で時代とともにオフィス関連機器のラインナップも増えていき、現在では550品目ほどを量産しており、売り上げの柱となっています。

発展のきっかけは、1950年の祖父の決断です。ちょうど工場が手狭になり生産が限界に近づいてきたため、前川科学の注文をもらわず、内田洋行に絞るという決断をし、同社の専属工場のような立ち位置を取ったのです。

しかしここで、大きな危機が訪れま

す。順調だった矢先に製造を担当していた共同創業者が前川科学に引き抜かれ、ものづくりができなくなったのです。そこで困った祖父は一念発起し、なんと機械の操作を覚えて、自らものづくりをするという選択をします。

戦後という時期であり、復興のために国が理科教育にお金を回したこともあり、理科実験機器はとにかく売れる状態だったそうです。その中で、理科実験機器の種類は徐々に増え、やれることも少しずつ増えていきました。

現在では、内田洋行から「こういった実験道具が欲しい」という要望や、オフィス家具のデザイン絵がくるので、当社がアイデアを入れながら図面に落とし込み、加工方法も含めて提案するという形のことが多いですね。ものによっては、どうしても作れないデザイン等もあるので、その都度、形状変更の打ち合わせをしたりします。

教育関連機器は、たとえば実験道具などは、数年に1回しか出ないものもあります。もっと極端な例ですと、学習指導要領が変わって教科書に載っていた実験がなくなるような場合、途端に売れなくなります。難しいのは、数年経って突然、学習指導要領に復活したりすることですね。ですので、商品として息の長いものが多く、廃盤になるものが少ないので、商品点数は毎年増えていく傾向にあります。

### さくら精機 株式会社

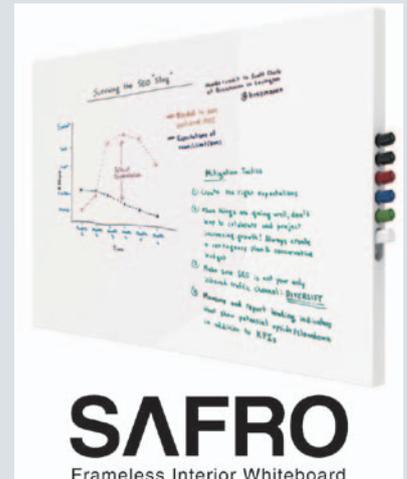
代表取締役社長：村本 一平  
本社：大阪府八尾市楠根町2-61  
創業：1948年  
社員数：68名  
事業内容：教育機器・事務機器・  
製本機器の企画・開発・  
設計・製造・販売

## ■多彩な製品群

大阪ものづくり優良企業賞2009、優良企業賞2010を受賞、近畿経済産業局 関西ものづくり100選にも選ばれている。教育関連機器で約800品目、オフィス機器で約550品目を誇る同社の製品群。皆様も、どこかで触れたことがあるかも。

## ■八尾市とのコラボ

同社の所在地である八尾市の産業振興の取り組みの一環としてデザイナーと開発中の「枠のないホワイトボード」。日経新聞にも取り上げられるなど、デザインを重視する設計事務所をはじめ、各方面から注目が集まる。



**SAFRO**  
Frameless Interior Whiteboard

## 製本機器で世界一に

製本機器がラインナップに加わったのは35年ほど前のことです。当時、内田洋行向けに製本機械を納めていた会社が廃業することとなり、当社が買い取ることになりました。そこから始まった製本機器事業も、現在では、穿孔機（製本用に穴を開ける機械）と、それに装着する中空ドリルの両方を供給しています。穿孔機とドリルの技術分野が全く違うことから、その両方を供給できるのは世界で当社だけです。



NC穿孔機

きれいに穴を開けるには、うまくいかない原因が機械かドリルかを見極める必要があります。他社は色々なメーカーのドリルを買ってトライしますが、当社は両面で分析することができますし、機械の特性に応じてドリルを改良することもできるのです。当社には世界最小サイズの1.5mmの中空ドリルの製造に成功した技術があり、紙の種類によってはのドリルの当て方など豊富

なノウハウも強みとなってシェアを伸ばしてきています。中空ドリル自体の世界シェアも現在2位です。

また、速度・精度ともに世界一を誇るマーブル貼り機（ノート等の背貼りをする機械）もありますが、最近のヒット商品は、カードカッター（カードを切り出す機械）というものです。

これを自社開発するには、電気や制御の知識も必要でした。10年ほど前に、工学部出身だが電気を全く学んでいなかった開発の人間が基礎から勉強したいと、土曜日にやっている講座に通って知識を身につけました。ちょうど電気機械の開発をやり始めた頃でもあり、カードカッターが当社で電気制御とメカトロを初めて導入したものです。このように、器用な生産に加えて、機械制御など付加価値をつけられる。ここが当社の強みと思っています。少量はどこともやりたがりませんが、当社はそれを進んでやって、きちんと利益を出す。機械は差別化もしやすいので、今後も伸ばしていきたいですね。

## 「さくら精機は何屋？」への答え

先ほど、オフィス機器で550品目と言いましたが、教育関連機器はさらに多い800品目程度あるので、合わせると1200品目を超えます。ここまで器用に色々なものを作れる会社は、なかなかないんじゃないかと思います。

たとえば三球儀という商品があります。これは太陽・地球・月の関係を学ぶものですが、ステンレスの切断・曲げ加工、内部ギアの加工も社内で行っています。理科室で使う電源装置を設計する能力もありますし、黒板に地域の地図を描いて納品したこともあります。よく「さくら精機は何屋なのか？」と聞かれるのですが、自分達でもどう表現したらいいか分かりません。そのくらい様々なものを作っています。



自社の技術で製造する三球儀

社長を務めていて感じたのは、電気やメカが自社でできるようになってから会社全体が元気になったということです。新しい商品の開発も増えましたし、この流れは途切れさせないで、常に新しい技術を取り入れて、できる範囲をさらに拡大させていきたいと思っています。同時に、誰にもマネできない技術を磨き、世間を驚かせる製品の創造を目指します。そのために必要な人と設備の投資は惜しみません。

貴重なお話、ありがとうございました